

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350047

研究課題名(和文) 授乳から捉える乳幼児期の養育役割に関する研究

研究課題名(英文) Parents' Childrearing Roles in Early Childhood in Relation to Infant Feeding

研究代表者

金子 省子 (KANEKO, Seiko)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：80177518

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、授乳に焦点をあて、ジェンダーの視点から養育役割を捉えることである。1970年代以降の日本の授乳関連施策の動向と授乳に関する情報を分析した。母乳推進運動を背景に母親に対しての支援は、母乳哺育支援となる。一方父親の育児参加推進を背景に登場した父親向けの情報のなかでは、人工栄養の授乳者としての父親が描かれる。しかし、父親の育児にかかわる権利という視点が明確でないことで、乳幼児期の養育者として、父親の補助的位置づけは変わらないことが指摘された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine parents' childrearing roles from gender sensitive perspective, focusing on infant feeding. We analyze about studies on breastfeeding, trends on maternal child health service after 1970's and information for parents now. Through the promotion of breastfeeding in Japan, support services are mainly for mothers' breastfeeding. On the other hand, to promote of fathers' participation in childcare, their bottle-feeding practices are described in father and child handbooks and magazines for fathers. And yet fathers are given supporting roles because of the lack of awareness about fathers' right on childrearing.

研究分野：保育学

キーワード：授乳 母乳哺育 母親 父親 育児情報 養育期待

1. 研究開始当初の背景

(1) ジェンダーにとらわれない養育環境づくりは急務の課題である。日本の現状では、特に乳幼児期の母親の育児負担が重いことから、ジェンダーの視点で、乳幼児期の養育環境を捉え直し、保育環境や労働環境の検討を行うことが求められている。同時に親に対する支援、青年に対する保育学習についてジェンダーの視点からのアプローチが必要である。

(2) 本研究は、授乳に焦点をあてる。乳幼児期の養育において重要な位置を占める授乳は、母乳分泌という女性の身体的特性にかかわる行為であると同時に、それを働かないことも含め社会的・文化的に変化する事象でもある。社会史研究においては「母性(愛)」の歴史的発見との関係で論じられ、母乳哺育の奨励が、母親による子育てを最良とする心性・養育観の誕生をあらわすものとして注目されてきた。現在では、母乳、混合、人工という栄養法だけでなく、乳児保育の普及や冷凍母乳という選択肢もある。このような養育行動である授乳に焦点をあてることで、乳幼児期の養育期待と当事者の認識をジェンダーの視点で捉えたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、養育行動の中でも母乳分泌という女性の身体的特性にかかわる授乳に焦点をあてることで、ジェンダーにとらわれない養育環境について探究するものである。なお、授乳の語は、母乳授乳のみを意味する場合もあるが、ここでは、母乳分泌に基づく母乳哺育だけでなく、それを働かない人工栄養や両者を用いる混合栄養などを含んで使用している。

(1) 授乳に関する先行研究に基づく視点の検討

社会史、医療人類学、社会学をはじめとしたジェンダーの視点から行われた社会科学的研究について収集する。そして、女性身体と養育行動・授乳に関する分析枠組みを比較検討する。

(2) 授乳関連施策と授乳関連情報にみる養育期待の考察

1970年代の母乳推進運動をはじめとして、授乳関連施策についての検討を行う。母子保健行政をはじめとする施策のほか、親を対象とした授乳情報のなかの親への期待を抽出し、養育期待をジェンダーの視点から捉える。

(3) 授乳者としての当事者の期待の認識と行動に関する考察

授乳に関する期待など乳幼児期の養育期待を中心として、養育の当事者がもつ授乳に関する意識や行動の実態を捉える。

3. 研究の方法

(1) 授乳についての先行研究としては、日本では母子保健分野の蓄積がある。それらの動向について捉えるとともに、本研究では、主として諸外国の社会科学的アプローチについて、収集し検討する。社会学、医療人類学等の分野で授乳に焦点をあてた養育者・養育期待の研究について整理・検討する。

(2) 母子保健施策の動向と授乳関連施策、母乳推進の動向をふまえ、母親や父親に向けた育児情報のなかの授乳期待を分析する。特に父親を対象とした育児情報を収集し、検討する。一部自治体発行の父子手帳等と呼ばれる冊子11冊と父親向け育児雑誌『FQ JAPAN』を分析対象として授乳関連情報の内容構成と養育者観を検討する。

(3) 1990年代の本研究者の母親・父親調査、2010年代の母親へのインタビュー調査の結果をふまえ、当事者調査の分析をすすめる。

4. 研究成果

(1) ジェンダー平等社会と授乳に関する研究から得られる視点

「母乳哺育は権力関係や多様な規範をもつ実践であり、政治的なものである」(Blum, 1999)のように、ジェンダー平等の観点から、授乳や母乳哺育を捉えることの重要性が指摘されている。一方、環境資源の持続という観点から母乳哺育がテクノロジーに依存せず、母子のニーズの充足にのみ合致するものとして評価されるとの指摘もある(Palmer, 1988)(Esterik, 2002)。また、ポスト構造主義フェミニズム理論の立場から文化的背景によって母乳分泌が女性のエンパワーメントとして構築されるとの見解もある。

このように、ジェンダー平等社会と授乳や女性の母乳分泌という特性について考察した研究は多いとはいえず、見解も一様ではない。しかし、母乳哺育の位置づけに関しては異なる立場をとる場合でも、当事者の経験、その母乳哺育観や行動を中心におき、当事者の経験そのものを詳細に検討することで、女性の「選択」を理解できるという指摘は共通している。それは、授乳支援イコール母乳支援という枠組みを相対化するものと考えられる。

(2) 授乳関連施策と育児情報にみる養育期待の分析

1970年代以降の母乳推進運動は、多様な栄養法がある環境で、「母乳哺育という選択肢を実現できる支援」を推進してきた。

母子健康手帳等に見られる授乳情報では、母乳を第一とし、それ以外の栄養法を次善とする位置づけが定着してきた。

一方、1990年代以降の少子化対策と子育て支援、男女共同参画社会の推進という施策の動向は、男性の育児参加を推進してきた。

本研究では、父親向け育児情報である父子手帳等と呼ばれる冊子と父親向け育児雑誌『FQ JAPAN』に着目し、授乳関連情報の内容構成と養育者観を検討した。

これらの冊子と雑誌は、発行形態、読者層などの相違点をもつ。すなわち自治体による無料の配布と市販の雑誌の相違があり、後者については比較的経済的にゆとりのある父親が読者として想定されている。

しかし、内容構成と父親観については共通する面をもっていた。乳幼児期の具体的な養育行動として、授乳も取り上げられており、粉ミルクによる授乳をする父親が描かれる場合が多い。ただし、母親の補助者ではない父親像が提示される場合でも、容易な育児参加を促す文脈で「子育てを楽しむ」父親像を提示することにより、2 次的な養育者観が払拭されないことが指摘された。雑誌記事の一部にみられる「父親の権利としての子育て」という視点を明確にすることが、2 次養育者としての父親像変革の手がかりとなることが指摘された。

(3) 授乳に関する期待と養育の当事者の意識・行動

前述の育児情報の分析からわかるように、父親は母親とは異なり、乳幼児期の2 次養育者の位置づけを与えられている。このことは、90 年代の母親や父親の調査においても同様であった。一方で、父親の育児休業がより注目され、イクメンの語が定着して父親の育児参加の取り組みが情報として伝えられる中で、女性の身体的特性にかかわる授乳のような養育行動についてもその描かれ方の変化が指摘される。

1970 年代の母乳推進運動以降、母乳栄養率は上昇したが、混合栄養の割合も高く母乳のみの割合が圧倒的というわけではない。にもかかわらず、母親を対象とした授乳情報では、粉ミルクや哺乳瓶は隠されるものとなる。一方で、父親の子育ての推進においては、授乳者としての父親は位置づけられており、その際には粉ミルクの授乳者として描かれることになる。こうしたより実際に即した養育の姿、様々な授乳の分担の姿が描かれることになる。

このように、父親の子育てへの参画は、母親の実際の負担を解消するだけでなく、母親による母乳授乳だけでなく多様な授乳へのかかわり、育児分担の実際と可能性を示すことで、母親だけが1 つの養育のあり方に向けて抱く負担感を解消する効果をもつと考えられる。

日本の母乳推進運動の展開においては、物としての母乳の利点だけでなく、母子関係形成上の利点も挙げられて、出産した母親が母乳の授乳者になることが推奨されている。従って母乳バンクや冷凍母乳という母体から切り離された人乳、母乳についてはあまり取り上げられることがない。

一方、父親の育児参画推進の方向性によれば、粉ミルクによる授乳をする父親像が排除されず位置づけられることになる。

この後者の方向性、授乳者としての父親像は父親を対象とする情報の中には明確であるが、このような情報はごく一部にすぎない。母親限定とされない一般的な育児情報においては、母乳第一で人工栄養が2 次的な選択肢とされている。母乳と母親、粉ミルクと父親という位置づけから、父親は母親の母乳哺育をサポートする養育者として位置づけられることになっている。

母親の授乳に関する葛藤は、多くの先行研究においても、本研究者の1990 年代および2010 年代の調査においても捉えられている。

母乳を希望しながら実現できず悩む母親については、看護等の専門家の支援とともに、育児休業や保育の場の支援が必要である。

一方で母親と父親への授乳についての期待の非対称性を意識化し、父親向け情報媒体の充実だけでなく、一般的な育児情報を父親の視点で検討して、父親の行動をより具体的に描くことが重要だと考える。これにより、母乳以外の選択肢を選ぶ母親も含めた多様な授乳行動への支援が行われ、主体的な「選択」としての養育につながると考えられる。

父親と母親の育児休業取得時期や乳児保育開始時期を具体的に検討し、そこでの授乳の具体的なあり方をさらに検討していく必要がある。授乳に関する情報がどのように描かれ、期待が位置づくかは、いまだに改善の余地があり乳児期の養育の具体像のなかに父親をいかに位置づけるかという点と授乳が1 つの鍵となることが指摘される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

金子 省子、父親を対象とする子育て支援父親向け活字情報の分析から、愛媛大学教育学部紀要、査読無、62 巻、2015、89-96

〔学会発表〕(計1件)

金子 省子、父親向け育児情報にみる養育者観について、日本家政学会、2015 年5 月24 日、いわて県民情報交流センター(岩手県・盛岡市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金子 省子 (KANEKO, Seiko)
愛媛大学・教育学部・教授
研究者番号：80177518

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：